



対がん協会報

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104-0045 東京都中央区築地5-3-3 築地浜離宮ビル7階
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

主な内容	4面	2025年度がん征圧スローガン決定
	5面	アグネス・チャンさん講演
	6面	院内がん登録2023年集計10年生存率

がん相談ホットライン 2023年度年報から

相談件数 1万217件

がん患者や家族などから無料で相談を受ける「がん相談ホットライン」の2023年度の年報がまとまった。相談件数は1万217件。前年度から1093件増え、コロナ禍前の件数には届かなかったが、4年ぶりに1万件を超えた。

2023年度のまとめ

ホットラインは予約不要で、相談者・相談員ともに匿名で実施し、看護師や社会福祉士が相談に応じる。2023年度の相談件数は月平均約850件で前年度比112%と増加。月別の相談件数では10月が939件で最も多かった。

相談者の男女比率は女性が80.3%(8200件)、男性が19.7%(2014件)と例年と同じく女性が多かった。また、年代別では、50代が37.2%(3796件)と最も多く、次いで60代19.4%(1981件)▽40代14.9%(1524件)▽70代10.8%(1100件)などの順になっている。

相談者の続柄は、患者本人が68.9%(7044件)、次いで娘9.3%(952件)▽妻6.2%(631件)となり、例年この傾向は変わらない。

相談を受けた疾患部位は、乳房28.3%(2893件)▽腎・尿管・膀胱12.1%(1232件)▽大腸9.3%(952件)▽肺7.8%(792件)が上位を占めた。腎・尿管・膀胱が多いのは、頻繁にかけてこられた方がいたためである。

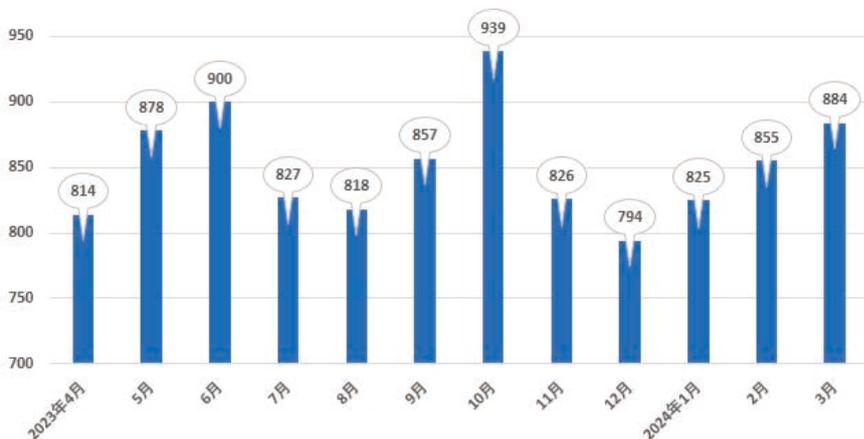
相談は全国、海外から寄せられている。相談者の承諾を得て居住地域(都道府県別)を聞いて

たところ、前年度同様、人口とがん診療連携拠点病院が多い地域が上位を占めている。特に、首都圏が多かった。海外の相談者は、主に海外在住の日本人だった。

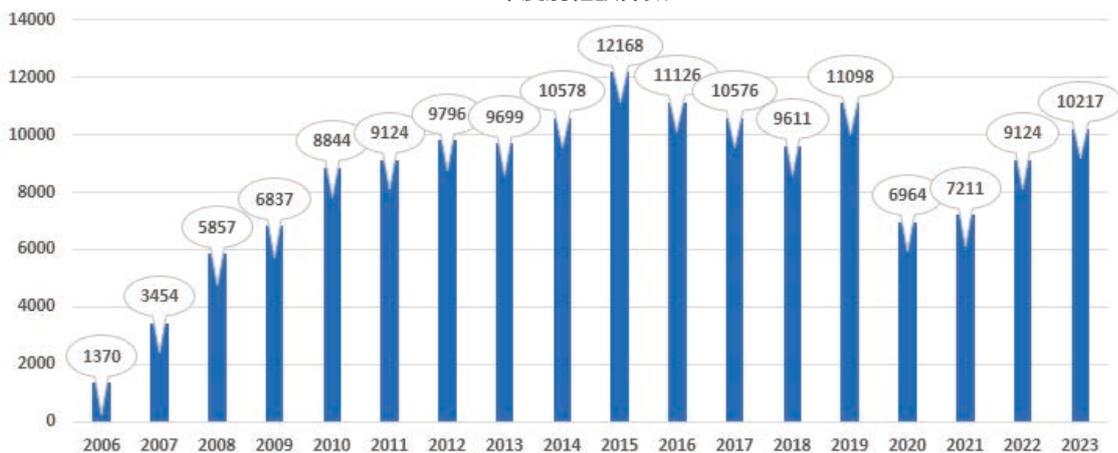
相談内容は一度の相談に複数の問題が絡んでいる場合が多く、相談員は複数の項目を選択できるようにしている。その中で最も比重の高い項目

を集計すると、「症状・副作用・後遺症」が26.0%(2652件)と最も多く、次いで「がんの治療」が20.5%(2091件)、「不安・精神的苦痛」に関する相談が15.7%(1601件)などとなった。「グリーフケア」も1.6%(165件)あった。また、相談内容の項目をすべて集計すると、「不安・精神的苦痛」が最も多く7069件、次いで「症状・副作用・後遺症」4567件、

月別相談件数



年度別相談件数



「がんの治療」3606件などの順になった。

本人と家族(配偶者、親、子、兄弟姉妹)では相談内容に違いがあった。本人は「症状・副作用・後遺症」が最も多く、次に「がんの治療」など。家族は「がんの治療」が最も多く、次いで「不安・精神的苦痛」などの相談が多かった。

初めての利用者は3190件、自己申告ながら二度目以上は6681件だった。初めての利用者がホットラインを知ったきっかけは、インターネット(2245件)が最も多く、次いでリーフレット(355件)など。

病院や他の相談機関からの紹介や友人・知人、家族の口コミもあった。また、2022年2月に発売した書籍「がんの？に答える本 がん相談ホットラインによせられた100の質問と回答」を見たという人もいた。

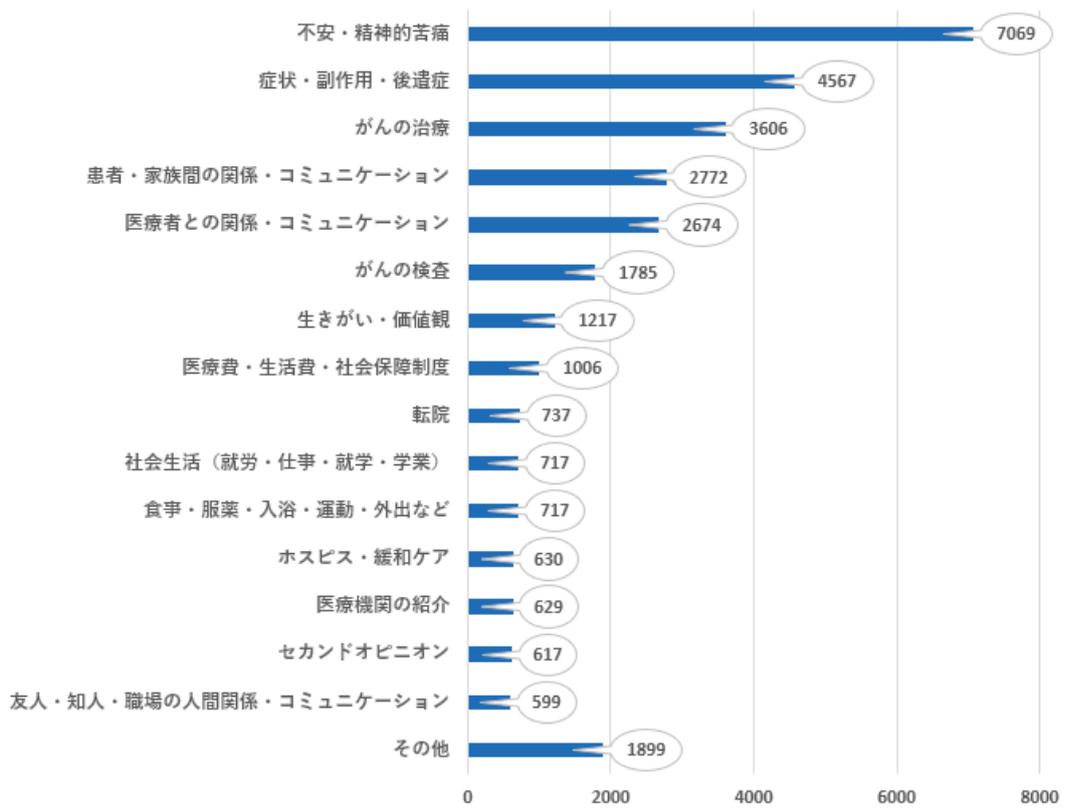
相談実績から 見えてきたもの

主たる相談を集計した「相談の内容」は「症状・副作用・後遺症」が最多だが、「相談内容総件数」は「不安・精神的苦痛」が最も多く、どの相談も根底に不安があるといえる。

患者と家族の相談内容の上位10位を比べると、患者は「症状・副作用・後遺症」、家族は「がんの治療」が最も多い。患者は副作用やがんの進行に伴う不安のため、症状に関する相談が多いのに対し、家族はできるだけ長く生きてほしいと願って相談してくる傾向があるため治療に関する情報を求めた相談が多い。それぞれ順位に違いはあるが、6項目が共通しており、患者も家族も患者・家族間の関係や医療者との関係、コミュニケーションで悩んでいることが伺える。

特筆すべきは残る4項目で、患者は

相談内容の総件数



生き方や就労、食事や外出などがんと共にどう生きていくかとの相談が多い。一方、家族は緩和ケアや在宅医療など療養や生活の場についての相談が多く、患者をどのような形でどの程度サポートしていく必要があるか、関わり方や少し先の備えとして相談にくる。

グリーンケアの相談も寄せられたが、診断・治療中からの利用者が引き続き相談にくる場合と、相談できる場所を探してかけてくる人がある。治療が終わると医療機関とのつながりがなくなることが多く、遺族への継続したサポート体制の必要性を痛感している。

二度目以上の利用者が多かったのは、治療の選択時に毎日のように集中的にかけてくる人、長く治療や経過をみていく中で受診の前後や検査前に気持ち落ち着かないとかけてこられる方が多い。また、不安が強く「一人になると怖い」と人とのつながりを求めてかけてこられる方や「話を聞いてほしい」とかけてこられる方も多い。

気になった相談

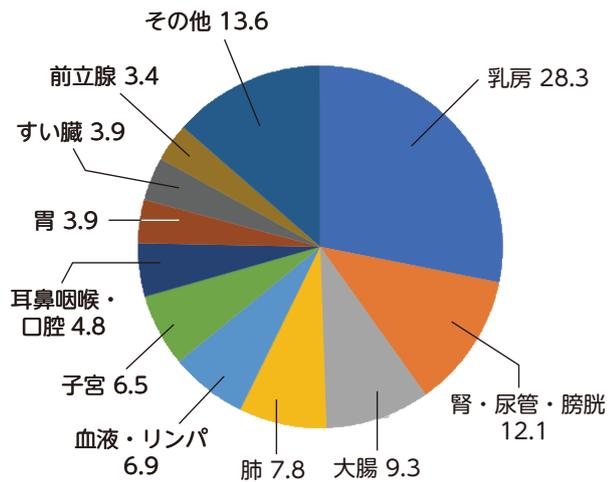
余命告知後の悩み
がん告知は原則患者本人に行われる

が、余命告知は様々だ。そもそも余命は医師も正確に予想できず、あくまでも中央値などを用いた予測で伝えられることが多く、その通りにならない。相談からみると、余命告知のタイミングは治療選択の参考として治療したときとしないときの比較▽本人や家族の希望▽治療法がなく緩和ケアへ移行するときの三つがある。

ホットラインの相談では「余命告知がなく、突然亡くなったように感じ、受け入れられない」という家族の一方、医師から丁寧な余命告知を受けて、やりたいことのリストアップや終活をして人生を有意義に生きようとする人もいた。

しかし、余命にとらわれて苦しんでいる人からの相談が多いのも事実だ。「死ぬことが現実的になり、自分の気持ちを受け止めきれない」「余命のショックが大きく、冷静に治療と向き合えない」「治療を諦められない」と内容はさまざまあり、伝え方、周囲の言葉のかけ方で前向きになる人がいれば、苦しむ人もいる。余命告知は本人や家族の希望によるものが望ましく、生きる希望を失わせないように丁寧に気持ちに寄り添った説明が必要だ。ホットライ

相談の疾患部位



ンでは、苦しい胸の内を話してもらい、その苦しみを何とかしようともがく人に寄り添い、少しでも気持ちが安らかになれるよう心がけている。

担当医とのコミュニケーション

担当医とコミュニケーションが上手くいかないという相談は開設当初から多くあるが、新型コロナウイルスの流行以降、より目立つようになった。担当医との関係悪化が治療に影響すると恐れているがん患者や家族は少なくない。「命を人質に取られているような感覚」と表現する人もいた。患者は担当医との会話のほか、挨拶や視線の合わせ方がいつもと違うだけでも病状に変化があったのではないかと感じることも珍しくない。

ンに電話する人も多い。そうしたことが積み重なると担当医への不信感になり、信頼回復は難しくなる。

ホットラインは担当医とのやり取りを振り返り、信頼の回復につながる糸口が見つかるよう努めている。担当医には、患者が診察室に入室した時には患者に体を向け、視線を合わせて微笑みかけるなど、あと一歩患者に寄り添った対応をお願いしたい。「一緒にやっていきましょう」というメッセージになり、良好な関係を築く一歩となるのではないかと思う。

療養場所で悩む終末期の高齢者

がん末期の独居高齢者や高齢夫婦世帯が療養場所やサポート体制の希望を医療者から聞かれた際、決めかねて相

談してくることがある。「在宅、緩和ケア病棟のどちらかを選ばなくてはならないのか」「自分は動けるが在宅医療は必要か」「どうやって在宅療養の準備をしたらいいか」と、どこから手を付けたらいいかわからないようだ。医療・介護・福祉の支援があっても自分の気持ちを整理できなかったり、周囲に自分の意思を伝えることが難しかったりする人もいる。在宅療養の準備はフォーマル、インフォーマルなサービスを組み合わせて行われるため、高齢者には複雑で、情報があってもどう選択するかは難しい。

また、身寄りのない高齢者は「実は……」と家庭事情を話し始めることがある。顔が見えない電話相談だからこそ話せるのだと思い、真摯に寄り添うようにしている。事情があっても決めきれない場合でも、話すことで気づきがあり、気持ちが固まっていくこともある。

ホットラインでは、相談者がどのように生活し、どのように生きたいのか丁寧に話を聞いて、自分の思いに気づいてもらえるようにしている。そして、それを叶えるためにどのような支援先があり、支援者にどう伝えようか良いかなどを一緒に考え、必要な支援先につながるようにしている。

利用者の声

診断前

精査中の不安

「がんかもしれない」と思うと不安で落ち着かない。家族にも状況は話しているが、ゆっくり話を聞いてもらうことはできないため、こうして話を聞いてもらえるのはありがたいです。気持ちが落ち着きます。

治療前

治療病院の選択

相談したことで自分の気持ちを整理できました。改めてしっかり考え、病院を決めたいと思います。

治療中

がんとの向き合い方

がん治療と家族の介護が重なり、ちゃんとがんに向き合えないまま、気持ちがモヤモヤしていた。話を聞いてもらい、励ましてもらって霧が晴れていくような感覚です。とても気持ちが落ち着きました。これからも頑張れそうです。

治療後

家族との関係性

配偶者との生活を見直したいと相談し、かかわり方のヒントを得られた。一人で考えてもこんなことは気づかないし、こんなおだやかな気持ちにはなれませんでした。

家族から

治療への考えの相違をどう埋めるか

家族は治療がつらすぎてやめたくなっている。自分は治療を続けさせる対応しか思い浮かばなかったが、別の対応の仕方があることが分かり、安心して診察に行けます。

遺族から

遺族の気持ち

親戚の心ない言葉で傷ついて相談した。自分だけの考えでは後悔してしまいそうでした。話を聞いてもらって、これから自信を持って生きていけます。今は生き返ったような気持ちです。

2025年度
がん征圧
スローガン

「健康は 予防と検診の 二刀流」

宮城県支部 物江一榮さんの作品に決定

日本対がん協会の2025年度がん征圧スローガンが「健康は 予防と検診の二刀流」に決まった。宮城県支部・物江一榮さんの作品。4月から1年間、日本対がん協会のポスターやリーフレットなどに掲載してがん検診受診を呼びかけるほか、希望する自治体や企業などの啓発資材にも使われる。

スローガンは毎年、全国のグループ支部から候補作品を募り、日本対がん協会の選考委員会が決めている。

2025年度の候補作品は40支部から182作品が寄せられた。

がんのリスクを下げるには禁煙、節酒、食事、運動などの生活習慣の改善、ワクチン接種による感染対策などの予防と、早期発見のための定期的ながん検診の受診が大切だ。物江さんの作品は、MLBの大谷翔平選手が今季、打者に加え、投手としても活躍が期待される中、予防促進と検診受診率の向上への期待と重なり、時宜を得て

いと評価された。がん征圧月間の9月、神戸市中央区で開催する「がん征圧全国大会 兵庫大会」で表彰式が行われる。

また、優秀賞には井上勇一郎さん(福岡)、杉元雛乃さん(宮崎)、吉永奈々子さん(長崎)の各作品が選ばれた。スローガン使用に関する問い合わせは、日本対がん協会の広報担当(電話03-3541-4771〈代表〉、メール:jcskouhou@jccancer.jp)へ。

最優秀賞

健康は 予防と検診の 二刀流

公益財団法人 宮城県対がん協会 検診課 物江 一榮さん



シンプルかつ印象深く主旨を強く伝えられると共に、方向性と価値観も共有できると思います。しかし、がん検診の受診率低下の要因として「受ける時間がない」「健康に自信がある」「検査の苦痛」などが挙げられると思います。今後は、受診の啓発運動・重要性・正しい知識を学んで受診していただければと思います。

優秀賞

始めよう！ 健康推し活 がん検診

公益財団法人 ふくおか公衆衛生推進機構 環境科学部 井上 勇一郎さん

最近、世間では大好きなものを熱烈に応援する言葉として「〇〇推し」「推し活」が流行っています。熱中している皆さんを見てみると「人生を楽しむためのライフワーク」なんだと感じました。一方、「がん検診」は人生を安心して過ごすための一助となるものです。さらに「健康を熱烈に応援する活動(健康推し活)」として楽しみながら続けられるライフワークにしてもらえれば幸いです。

優秀賞

がん検診 あなたを守る 第一歩

公益財団法人 宮崎県健康づくり協会 小林駐在 杉元 雛乃さん

がん検診を行う中、「なかなか気持ちが向かず、家族に何度もお願いされて初めて受診した」という方に異常が見つかり、「早く受診していれば」という気持ちと、「これ以上発見が遅くならず良かった」と安堵を抱きました。初受診には勇気も必要でしょうが、救われる命もある。症状がなくても本当に大丈夫かは分かりません。まずは一歩踏み出してほしい。本人やご家族、大切に思う周囲の方が安心して過ごせるようがん検診を受けてください。

優秀賞

「もう行った？」声掛けあって がん検診

公益財団法人 長崎県健康事業団 健康企画課 吉永 奈々子さん

「今年ががん検診もう行った？」という誰かの一声が受診をためらっている人の後押しになり、一人でも多くの方の受診につながればいいなと、このスローガンを考えました。また、近年は、小学生からがん教育が実施されているので、大人同士に限らず子どもから大人への声掛けにも期待したいです。あのときちゃんと受けておけば…と後悔するよりも、今年も受けて良かった！と思えるよう多くの方にごがん検診を受けていただきたいです。

Reライフフェスティバル 2025 春

アグネスさん
講演

「がんと共に生きる 支えあう社会へ」

日本対がん協会は3月3日、Reライフフェスティバル2025春(朝日新聞社主催)の協賛プログラムとして、歌手・タレントのアグネス・チャンさんらを講師に迎え、「がんと共に生きる 支えあう社会へ」と題したトークショーを開催した。

アグネスさんは歌手活動のほか、エッセイスト、ユニセフ・アジア親善大使、日本対がん協会「ほほえみ大使」などとして幅広く活動している。

2007年10月に乳がんの手術を受けたが、発見のきっかけは、がん患者・家族を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん征圧をめざすチャリティ活動リレー・フォー・ライフ(RFL)との出会いだった。

2006年に出演したテレビ番組で、茨城県つくば市で開かれたプレ大会が取り上げられてRFLの活動に興味を持ち、翌年、兵庫県芦屋市で日本対がん協会と地元実行委員会が主催したリレーイベントに参加した。それまでがん検診を受けたことがなかったが、イベント参加を通してがんに対する意識が高まったこともあり、右の乳房に小さなしこりがあることに気がつき、早期発見できたという。2008年には、日本対がん協会の「ほほえみ大使」に就任し、がん検診の受診とがんの早期発見を呼びかけてきた。

RFLへの参加を通して「がんになっても怖くない」ということを学んだという。仲間がいると気持ちが軽くなり、元気も出やすくなる。いろんな悩みを抱えても互いに支え合っている。仲間の想



「支えあう社会」に向けて遺贈寄付が取り上げられた

いを忘れずに次代へ継ぐ「命のリレー」の大切さを語った。また、がんになったことで「命は当たり前ではなく、一日一日が恵みであり、毎日が誕生日になった」と話し、人との出会いを大事にしているという。

後半は、遺贈寄附推進機構代表取締役の齋藤弘道氏が加わり、人生最後の社会貢献といわれる「遺贈寄附」を中心に語り合った。齋藤氏は「寄附をすることは、社会のためにお金を使うことで、望む未来やあるべき社会の姿を選び取る行為。自分の関心がある社会問題に取り組んでいる公益団体に遺贈寄附をすることは、その活動を支え、自分の生きた証しになる」と遺贈寄附の普及に取り組んでいる。

齋藤氏は、相続人不在で国庫に帰属した遺産が2023年度に1015億円と過

去最高になった一方、遺贈寄附の総額は約3分の1だと指摘。遺産に関する考えを整理し、エンディングノートや自筆証書遺言の制度などを活用して早めに自分の意思を書き残しておくことが大切だとアドバイス。ユニセフ大使として諸外国を訪ねるアグネスさんは万が一に備え、何度も遺言を書いた経験を交えながら「自分のためではなくて残された方

のため」と語った。また、東日本大震災後に被災者支援の募金を呼びかけたことから、社会全体で助け合うことの大切さにも言及した。

齋藤氏は、遺贈寄附について「次の世代に恩を送っていくという意味がある」とし、社会課題の解決に取り組むNPOや公益法人を支援することによって社会が変わり、寄附をする側にも社会を通してのリターンがあると説明した。また、充実感や満足感を得られ、人生が豊かになるのではないかと話した。アグネスさんも「自分のレガシー(legacy)を考えると、花の種を植えるのと一緒ですよ。種を植えたなら子どもや孫が花を見られる。遺贈寄附はまさしく種を植えることですよ」と話した。



講演後の撮影会には多くのファンが並んだ



日本対がん協会のブースにも多くの人が訪れた

院内がん登録2012年 10年生存率集計 公表

サバイバー5年生存率を初集計

国立がん研究センター

国立がん研究センターは2月、2012年にがんと診断された約39万人の院内がん登録データから10年生存率を算出し、公表した。実測生存率は46.6%、純生存率(Net Survival)は54.0%だった。また、サバイバー5年生存率を初めて集計した。がん診断日から生存が1年延びるごとに、その後の5年生存率は改善する傾向にあることが分かった。

2012年症例の10年生存率は、院内がん登録データを提出した拠点病院と拠点外病院のうち361施設、39万4108例を集計・分析した。全がんの生存把握割合は97.3%。すべての死因を計算

に含めて診断日から10年後の患者の生存割合を示す実測生存率と、がんだけが死因になる状況を仮定して生存割合を示す純生存率の二つを算出した。がん種によって年齢階級別の実測生存率と純生存率に大きな差がみられたが、年齢が高くなるほど、がん以外の原因で亡くなる確率が高くなることが影響したと考えられる。

サバイバー生存率は、診断日から日数が経過した時点を基準に一定期間を生きる確率。大腸がんⅢ期の場合、診断日から5年後の5年実測生存率は68.0%だが、診断日から1年経過後を基準にしたサバイバー5年生存率は

68.7%、2年経過後は70.9%と、診断日からの生存期間が延びると、その後のサバイバー生存率も上がる傾向がみられた。

また、多くのがん種で根治が見込める早期の場合、診断日からの生存期間の長さに関わらずサバイバー生存率はあまり変わらないが、がんが進んだ状態で生存期間が延びると、サバイバー生存率も改善する傾向がみられた。

一方、乳がんは病期によらずサバイバー生存率はあまり変化しなかった。長期の治療と経過観察が必要なサブタイプがあることが影響したと考えられるという。

対策型検診がある五つのがんの10年生存率

部位		全症例	I期	II期	III期	IV期	平均年齢	生存状況把握割合(%)	
全がん	症例数	39万4108	—	—	—	—	67.7歳	97.3	
	実測生存率	46.6	—	—	—	—			
	純生存率	54.0	—	—	—	—			
胃がん	症例数	5万6237	3万4744	5255	5953	9312	70.6歳	97.3	
	実測生存率	47.6	64.6	44.0	25.2	3.4			
	純生存率	57.9	79.1	52.0	29.3	3.9			
大腸がん	症例数	4万9206	1万2816	1万3264	1万2559	9701	69.6歳	97.0	
	実測生存率	48.7	66.3	58.0	52.6	10.2			
	純生存率	58.1	79.2	70.7	61.6	11.6			
	結腸がん	症例数	3万2201	8268	9279	7711	6381	70.8歳	97.0
		実測生存率	47.8	64.6	57.6	51.9	9.5		
		純生存率	58.0	78.5	71.2	61.8	10.7		
直腸がん	症例数	1万7005	4548	3985	4848	3320	67.4歳	97.0	
	実測生存率	50.3	69.4	58.9	53.6	11.7			
	純生存率	58.2	80.4	69.3	61.3	13.1			
肺がん	小細胞肺がん	症例数	4396	293	279	1260	2508	70.4歳	98.5
		実測生存率	5.5	20.6	13.3	9.6	0.7		
		純生存率	6.3	24.4	15.1	11.1	0.8		
	非小細胞肺がん	症例数	4万3560	1万7461	4031	7685	1万3703	70.5歳	98.1
		実測生存率	28.0	55.2	27.2	13.5	2.5		
		純生存率	32.6	64.6	31.7	15.4	2.8		
女性乳がん	症例数	3万3715	1万5215	1万2310	3988	1916	59.6歳	96.9	
	実測生存率	77.7	88.1	80.5	60.1	16.1			
	純生存率	82.5	93.7	85.4	63.8	17.0			
子宮頸がん	症例数	6576	2952	1068	1543	913	54.1歳	95.1	
	実測生存率	65.2	88.7	66.7	50.5	15.3			
	純生存率	67.5	91.0	71.0	52.6	16.0			

※国立がん研究センター「院内がん登録2012年10年生存率集計」より作成

東京都立千歳丘高校で保健講話

日本対がん協会が協力

がんサバイバーの体験談から健康と命の大切さを考える

東京都立千歳丘高校は3月17日、2年生約200人を対象に「がん」をテーマにした保健講話を実施した。がんに関する正しい知識の理解を深め、がんサバイバーの体験談を通して生徒自身や家族、友人ががんになった時にどうすればよいか、健康や命の大切さについて考えることが目的。日本対がん協会はがんサバイバーの講師を派遣し、協力した。

講師は、がん患者や家族を支える活動をしている「がんサバイバー・クラブ」の堀均さん(73)が務めた。肺がん

サバイバーで、現在は食道がんを治療中。堀さんはがんの仕組みについて、遺伝子が傷つき、異常な細胞が増える病気で、誰でも起きる可能性があるとして説明。しかし、たばこを吸わない▽他人のたばこの煙を避ける▽バランスのとれた食生活といった生活習慣の改善、がんを引き起こすウイルス感染防止などでリスクを抑えられるとアドバイスした。また、早期発見で治せるがんもあり、定期的ながん検診を受けることが大切であり、家族にも伝えてほしいと促した。

チャリティ活動リレー・フォー・ライフを知り、長年参加してきた。その間、肺がんは寛解した。ところが2024年末に食道がんが見つかり、現在、免疫チェックポイント阻害薬による治療を続けている。

新薬開発などでがん医療が進む半面、治療費は高額になっている。堀さんは体験を踏まえ、治療費の一定額を公的医療保険から支給して個人負担を軽減する高額療養費制度や国民皆保険制度の意義を語った。また、周りの人ががんになったら「誰のせいでもない」「何かすることない？ 助けるよ」と声をかけ、寄り添ってほしいと呼びかけた。

講演後、生徒代表が「がんの仕組みをわかり易く説明していただき、ありがとうございました。食生活などの生活習慣を考え、禁煙や受動喫煙についても家族にも伝えたいです」と感想を述べた。

堀さんは2000年に肺がんが見つかり、放射線治療と2度の手術を受けた。治療中は勤務先を休み、家族に経済的な心配をかけるなどつらい思いをした。その後、2006年にがん患者・家族を励まし、がん征圧をめざす



クイズを交えながら、がんに関する知識を学んだ

2025年度版

「がん検診」「女性のがん」リーフレット完成

日本対がん協会の2025年度版啓発リーフレット「がん検診 ～5つのがん検診と健康習慣～」「女性のがん ～乳がんと子宮頸がん～」が完成した。

「がん検診」は、がんによる国民の死亡率を低減させるとの科学的根拠に基づき、国が推奨している5つのがん検診(肺、胃、大腸、乳房、子宮頸部)の検査内容、がん検診のメリットとデメリット、がんのリスクを下げる「5+1」の健康習慣などについてイラストを交えて解説している。

「女性のがん」は、20代後半～50代前半では女性のがん罹患率が男性を上回っていることから、「乳がん」「子宮頸がん」に関する基本的な情報をまとめた。

乳がんへの対策では「ブレスト・アウェアネス」(乳房を意識する生活習慣)が推奨されていることから「ブレスト・アウェアネス 4つのポイント」を紹介している。

また、子宮頸がん対策では、主な原因となるヒトパピローマウイルス(HPV)の感染を防ぐのに有効なワクチンの定期接種と、海外からの研究報告などを紹介。子宮頸がん検診の検査内容などをイラストとともに解説している。

いずれも2025年度がん征圧スローガン「健康は 予防と検診の 二刀流」が入る。A4判、両面カラー印刷となっており、三つ折りにしても扱いやすい構成となっている。

問い合わせは、日本対がん協会広



報担当(電話：03・3541・4771 〈代表〉、メール：jcsorder@jcancer.jp)へ。

国・地域でのがん対策推進、がん患者支援などに尽くした個人・団体を顕彰

2025
年度

「日本対がん協会賞」
「朝日がん大賞」

候補者募集

6月26日
締め切り

日本対がん協会は2025年度の「日本対がん協会賞」「朝日がん大賞」の各候補推薦(個人・団体)の募集を始めた。有識者による選考委員会と日本対がん協会が受賞者を選出・決定し、「がん征圧月間」の9月、神戸市中央区で開催する「がん征圧全国大会兵庫大会」で表彰式を行う。応募締め切りは6月26日(必着厳守)。

日本対がん協会賞は、協会設立10周年を迎えた1968(昭和43)年度に創設された。がん検診の指導やシステム開発、第一線で検診・診断活動、がん予防知識の普及・啓発などで長年にわたり地道な努力を重ねた個人と団体が対象で、それぞれ数件を選出する。

朝日がん大賞は、日本対がん協会賞

の特別賞として2001(平成13)年度に朝日新聞社の協力を得て創設された。「がん予防」を中心に、がん医療・がん研究、画期的な医療機器の開発、がん患者・サバイバーの支援など幅広い分野が対象になる。活動期間は問わず、第一線で活躍している個人または団体の中から1件を選出する。

審査結果はがん征圧月間が始まる9月1日付で日本対がん協会のホームページなどで発表する。日本対がん協会賞は正賞(レリーフ)と副賞(記念品)、朝日がん大賞は正賞(レリーフ)と副賞

(100万円)が贈られる。

候補者の推薦は、所定の推薦用紙に必要な事項を記入し、下記へ郵送する。資料がある場合は同封し、論文は代表的なもの(主著論文)5本までとする。

詳細は、日本対がん協会ホームページ(<https://www.jcancer.jp/>)のニュース「募集要項」で。推薦用紙や推薦基準をダウンロードできる。問い合わせは、日本対がん協会内の事務局(電話：03-3541-4771〈代表〉、メール：jcskouhou@jcancer.jp)へ。

〒104-0045 東京都中央区築地5-3-3 築地浜離宮ビル7階
公益財団法人 日本対がん協会「日本対がん協会賞」係宛

締め切り：6月26日(木) 必着厳守

2025
年度

「がんアドボケート活動助成事業」

3つの活動が決定

日本対がん協会

日本対がん協会は「がんアドボケート活動助成事業」の助成対象として三つの活動を決定した。この助成事業は、「がんになっても希望を持って暮らせる社会の実現」をめざしたがん患者・家族の支援活動に対して助成を行うもの。日本対がん協会が主催した「がんアドボケートセミナー」を受講

し、がん患者・家族支援に必要と考えられる一定の知識を習得した修了生を対象に募集した。

申請された活動は、いずれも当事者が考える豊かで活力ある支援活動ばかりだった。日本対がん協会の助成審査委員会が活動の妥当性、公益性、発展性など多角的な視点から総合的に審査

を行い、新規の単年度活動1件と継続活動2件を助成対象として決定した。

日本対がん協会は今後、助成金の提供に加え、各採択団体への伴走支援を行い、「誰ひとり取り残さないがん対策」の推進に向けてともに取り組んでいく。

2025年度「がんアドボケート活動助成」採択一覧

	助成活動の名称	団体名	助成額
新規	「がんを知り、ともに考える」市民公開講座 in 那須塩原市図書館みるる	みんなで知ろうがんのこと栃木	45万円
継続	がん教育外部講師を育成し地域をこえてつなげるプロジェクト	一般社団法人LINKOS	50万円
継続	「顔の見える」ピアサポート・ネットワーク構築事業	がんを経験した女性のコミュニティ Colorful Ribbons	20万円

(順不同)

がん相談ホットライン 03-3541-7830

毎日受け付けています

【受付時間】 10:00~13:00 15:00~18:00

社会保険労務士による「がんと就労」電話相談の予約はインターネットの専用フォームで受け付けます。がん専門医による相談は今年度休止します



社労士による電話相談

電話がつながりにくいことがあります。何卒ご了承ください